

O1-042

受診患児からみた幼児健診結果について
ー保護者の受けとめと実際の解離ー

笹瀬 瑛子、鈴木 郁恵、岡田 千慧、内藤 香、
阿部 祥美、堀 仰之祐、加藤 真理子、鈴木 瞳、
柏木 直見、宮司 登志江、尾関 ゆかり、
伊藤 智恵子、鈴木 輝彦、遠藤 雄策、平野 浩一

浜松市発達医療総合福祉センター

【はじめに】

浜松市発達医療総合福祉センター友愛のさと診療所（以下当センター）は年間約750人の新規患児の受診があり、その多くが発達障がい児である。初診時年齢は2歳が最も多く、次いで3歳、4歳、1歳である。紹介元は医療機関と保健師がそれぞれ約25%を占め、乳幼児健診等で早期発見・早期療育につながっている一方、園や学校からの紹介が約20%あり、就園就学後初診となる患児も少なくない。そこで1歳6か月児健診及び3歳児健診双方（以下幼児健診）を問題なく通過した初診患児の実際について調査した。

【対象と方法】

X年4月～9月の6か月間の当センター初診患児342名を対象とする。

1. 上記342名のうち幼児健診を問題なく通過したことが明らかかな9名（以下A群）とそれ以外（以下B群）に分け初診時年齢を比較した。
2. 上記342名のうち初診時インテーク面接で保護者が幼児健診を通過したと申し出たケース119名（以下C群）とそれ以外（以下D群）に分け初診時年齢を比較した。
3. A群を対象に主訴、検査結果、診断名等を診療録から調査した。

【結果】

1. 初診時平均年齢はA群5.5歳 $\pm$ 3.24、B群5.09歳 $\pm$ 3.55であり有意差は認められなかった。
2. 初診時平均年齢はC群7.3歳 $\pm$ 3.22に対し、D群3.9歳 $\pm$ 3.13とC群の方が有意に高かった（ $p<0.01$ ）。
3. 初診時主訴は「スーパーで走り回る」等多動や感情のコントロールに関するもの、不適応行動、発達の遅れ等があった。検査結果より、知的障害なしが5名、軽度知的障害が2名、不明が2名、PARS平均は 8.5 ± 2.66 だった。診断はADHD4名、ASD3名、軽度知的障害1名、抑うつ1名だった。紹介元は保健師5名、就園先2名、医療機関1名、紹介なし1名だった。

【考察】

初診時年齢についてA群とB群で有意差は認められないが、C群とD群には有意差が認められ、健診時の問題点が伝わっていないと早期発見されても専門機関へつながる年齢が遅くなることが分かり、保護者にどのように問題点を伝えるかが重要であると考えた。

またA群は検査結果から知的障害がなくASD症状が穏やかな児であった。紹介元は保健師が最も多く、多動や感情のコントロールなどの困難さに気づいた保護者から自発的に相談し紹介されていた。このような児は幼児健診では発見しづらく、日常生活や集団生活での困難さから専門機関につながっており、保健師等がタイミングを逃さず保護者の相談を受けられる体制が整っていたことで早期に専門機関への相談に至っていた。